

賀川豊彦 青春の38通

期に「私は泣かないことにした。泣いても泣かない」と自分を奮い立たせるような記述もある。研究者は「賀川の若き日の本音や葛藤(かっとう)がにじむ貴重な資料」と話す。(木村信行)



賀川豊彦

日本を代表する社会運動家として知られ、ノーベル平和賞と文学賞の候補にもなった賀川豊彦(1888~1960年)が青年時代に親友に送ったはがき38枚が、芦屋市の女性宅から見つかった。神戸で貧しい人々の救済活動をしていた時

救済の道「私は泣かない」

—— 芦屋の女性宅 はがき発見 ——

神戸で活動 苦悩つづる

賀川は神戸市出身。明治末期、21歳の時、神戸市旧真合区(中央区)で、貧しい人々が大勢いた地域に住み救済活動を開始した。この時の体験を書いた。この時の体験を書いた。この時の体験を書いた。

賀川は神戸市出身。明治末期、21歳の時、神戸市旧真合区(中央区)で、貧しい人々が大勢いた地域に住み救済活動を開始した。この時の体験を書いた。この時の体験を書いた。この時の体験を書いた。

研究者だった昌樹氏(1886~1944年)と賀川が明治学院高等部の同級生で、交流は生誕続いたという。

神戸で活動をして6年目の1914(大正3)年には、信仰するキリスト教について「貧民窟に熱烈に伝道できない」「信仰は醒めて居る。保養する頃かも知れぬ」など、向き合う現実の重さや、信仰への迷いを吐露する記述もある。

はがきの大半は、アメリカ留学を挟み、賀川が神戸での救済活動に没頭した20~30代に出されたもので、留学の決意や、感銘を受けた本の感想などが記されている。また、ほかに持病だった目の悩みを打ち明けたり、中山氏の家族の健康を祈ったりと賀川の人柄がにじんでいる。

はがきの分析をした神戸文学館の義根益美学芸員は「大きな業績の陰で知られていなかった賀川の悩みや本音が分かる」と話す。はがきは同文学館で開かれる「賀川豊彦の文学2」展(12月18日~3月21日)で公開される。



青年時代の賀川が葛藤をつづったはがき